

MISt-X07 マルティン・ルターの宗教改革

キリスト教はこれまで何度かの分裂を起こしてきたが、そのうちの大きなものの一つに中世ヨーロッパにおけるプロテスタンティズムの誕生が挙げられるだろう。それは「宗教改革」と呼ばれ、ドイツのルターがローマカトリック教会の贖宥状(しよくゆうじょう:免罪符)に対して異議を唱えたのがきっかけであった。

16世紀には他に、自国フランスでの迫害から逃れ辿り着いたスイス・ジュネーブにおいて宗教改革(教会改革)に30年近く取り組んだジャン・カルヴァンや、スイス・チューリッヒでルター同様の贖宥状批判や聖書主義に基づく社会的な変革を進め、教会だけでなく政治権力をも相手に対立する一方で福祉に力を注ぎ学校や病院を作るなどしたフルドリッヒ・ツヴィングリがいた。

さて、その「宗教改革」の発端となったローマ教会批判は、ヴィッテンベルク大学教授ルターが認(したた)めたものだった。1517年10月、33歳のルターは教会、信者、政治を大きく巻き込んだキリスト教の大改革の口火を切った。もちろんルター自身にとっても大きな転機の年であった。そのことを証明するように、「ルター」という名前には「1517」という数字のダブルイメージが含まれているのだ！

ほら、コレ →

結論

1517年に始まり、長年に亘って各地で進められた宗教改革は、マルティン ルターこそがやらなければならないと既に運命づけられていたのだった！

そういうことでどうですか？

ルター
ルター
ルター
ルター
ルター
ルター

～マルティン・ルターの生涯～

(これオリジナル編集であって、他からパクって作ったコピペ編集ではありません。)

マルティン・ルター(Martin Luther)は、1483年11月10日、ドイツのアイスレーベンで生まれた。父ハンスは、元は農民であったが銅鉱山の坑夫を経て銅精錬所を経営し成功した。そんな父は教育に対して厳しく臨み、ルターを法律家にしようといふ頃から勉学の機会を与え、ルター自身もまたその期待に応えるべく勉学に励んでいた。

転機が訪れたのはエルフルト大学法学部に在籍中の21歳の夏のある日。シュトゥットゲルンハイムで激しい雷雨に遭い、死の恐怖にさらされたルターは「**聖アンナ様！助けて下さい。私は修道士になります！**」と叫び、その後直ちに両親や友人の反対を押し切って、誓い通り聖アウグスチヌス修道会に入った。修道院で厳しい修行をし、大学で教えたりしながら神学博士となり大学教授になる。しかしこの間もずっとルターは**神の怒りに怯え、神の救いを探し求め、信仰に対する葛藤に悩み、死を恐れ続けた。**

そんなある日、『ローマの信徒への手紙』の中にあるパウロの言葉により、(神に救われようとして)人間が自ら努力する(善行を積む)ことで神に救われるのではなく、神を信じて**ただひたすら信仰**することによってのみ「神の義」を得ることができるという『信仰義認説』を会得し悟った。言い換えれば、「神の義」は、人間が自分の意思による努力で獲得できるものではなく 神から与えられるもの、ということだ。

当時のドイツはローマ教皇の支配力が強く、折りしもローマ・カトリック教会はサン＝ピエトロ大聖堂の建築費用として資金の調達が必要で、信心深いドイツの人々から税金を搾り取り、また罪が赦され天国に行けるようになるとして贖宥状(しよくゆうじょう: 免罪符)を販売した。ドイツの人々は信仰に篤かったが(ドイツ語で書かれた聖書が無いせいで)聖書の教えを直接には知らず、ローマ・カトリック教会が勝手に作った教会に都合の良い間違った教えを疑いなく信じ、そのために、「これを買えば罪が赦され、魂が救われる！」と教会が大々的に売り出した贖宥状を人々は買い求めたのだった。

ルターは、そんな教会のやり方に大きな疑問を抱いた。もっとも大きな問題は、「**免罪符で罪が赦されるなんて、聖書のどこにも書いてない！**」ということ。そしてルターは、

『聖書のみ、信仰のみ、神の恵みのみ』という**聖書中心主義**の原理が信仰の本質であるとした考えに基づき、聖書に記載のない免罪符や、教会が神にかかわって人々の罪を赦そうとする考え方は誤った教義だと指摘した「**95箇条の提題**」という**意見書をドイツのカトリック教会の扉に貼り付けた。**

ラテン語で書かれたこの1枚の紙は、ドイツ語や他の言語にも翻訳され、グーテンベルクが作った印刷技術システムによって大量に印刷され、ドイツだけでなくヨーロッパ中に波紋を広げた。これが、「宗教改革」の始まりである。1517年10月31日に「95箇条の提題」を発表してから、ルターは宗教改革者としてローマ教会と長い間戦い続けることになるのだ。

この後は年表で。。。

1518年	アウグスブルグ総会：自説の撤回を要求される(ルターは拒否)
1519年	ライプチヒ神学論争(vs ヨハン・エック)
1521年	ローマ教会から破門宣告が出される
1521年	ウォルムスの帝国議会：神聖ローマ皇帝カール5世が国会にルターを召喚し自説の撤回を迫る(ルターは拒否)
1521年	ルターを支持するザクセン選帝侯フリードリヒにかまわれる
1522年	新約聖書をドイツ語に翻訳
1525年	聖職者でありながら結婚(聖書には聖職者の結婚を禁止する明確な記述がないとして。)
1526年	カール5世、ルター派を禁止
1530年	ウォルムスの勅令(ルター派はローマ教会に服従せよとの命令)
1534年	旧約聖書をドイツ語に翻訳
1545年	トリエント公会議：両派の調停を目的とした会議(ルター側は欠席)
1546年	生まれ故郷のアイスレーベンで死去 享年 63歳

※ちなみにグーテンベルクはルターと同じエルフルト大学で学んだそうだが、自ら印刷をしていたのは主に1450年代であり、1468年に没しているため、時代的に全く異なるルターとは出会ってはいない。残念。